

## リレーコラム

# 首都圏内大学の畜産系学科における牧場実習の留意点

### 1. はじめに

筆者が勤務している日本大学生物資源科学部（神奈川県藤沢市）の動物資源科学科では、大学1年次の選択科目として、キャンパス内の付属農場において牧場実習（実習として1単位）を実施している。乳牛、豚といった家畜を実際に扱い、牛乳の生産、豚肉生産の現場での作業を経験する内容である。これは学科のほとんどの新入生（120～150名）が受講しており、この学科の特色をだした初年次教育の代表的なものといえる。ただその実施にあたっては、対象学生はまだ高校を卒業したばかりで、ひじょうに異なる生活環境から入学してきたことを認識しておく必要がある。主に筆者が担当してきたこの13年間では、特に都会型の大学という環境下で留意すべき点が多くあり、この間に考え実践してきたことをいくつか紹介したい。

### 2. 入学学生のバックグラウンド

現在は同業の他大学にも畜産学科の名称はほとんど残っておらず、「動物～学科」という名称に変更されており、入学時には野生動物や伴侶動物の研究を希望する学生が大半である。以前の時代には畜産業の後継者、農業高校出身者が少なからず入学してきており、基本的な家畜についての知識を改めて教える必要性は小さかった。ただ、動物全般について幅広く教育と研究を行う学科へと改称したことと、より首都圏在住の学生の入学比率が高まったことによって、現在の学科の学生のほとんどは、身近でウシ、ブタ、ニワトリといった家畜が飼育されているという経験は無いまま、もちろん実際に触ったことも無いままに入学してくる。そのため、教員側が今更教える必要もない常識と思いついておられるようなことであっても知らないことが多い。例えば、乳牛は、妊娠して子供（子牛）を産むことで、はじめて牛乳を生産しはじめることや、当然、乳牛の性別はメスであることも知らない学生が多く入学してくる。しかしながら、卒業後の就職先としては畜産業や飼料メーカー、乳業メーカー、食肉メーカー、農林水産省や都道府県などの畜産関係部署に毎年、一定人数以上が就職して活躍している。つまり大学在学中に畜産関係についての基本から応用まで学習し、さらに実際の実習経験を積むことによって、そのような将来の可能性に出会っていると云える。大学入学まで家畜に触れた経験が無いことを前向きに解釈すると、物心ついてから、まっさらな状態ではじめて大型の動物に触れたときの感激はとても大きく、それが卒業後の進路選択に直結してくる場合も多い。

これをいっそう充実させるためには、現在の入学直後の学生に対しての畜産関係の教育内容は、過去の初年次教育と比べて、より丁寧に基本から開始して、より深い学習へつなげていくことが求められている。そのような現状認識のもとに、この牧場実習の事前講義においては、大学生向けの専門の家畜飼育管理の教科書は用いず、おもに農業高校生を対象とした畜産関係の教科書を購入し、ほんとうの基本的な知識からの講義を心がけている。

### 3. 事前の健康状態の把握

まず、畜産現場の実習ということで、実習において事故が起こらないことを第一に考える。入学当初のガイダンス時には、受講希望者に調査カードを配布し、緊急連絡先だけではなく、健康状態についても申告させるようにする。情報の取扱いには注意しなければならないが、現場の指導担当者同士の情報共有は必ず行う。また、実習に支障をきたすかもしれない健康状態の記載があった場合には、事前に直接本人に聞き取りをしている。様々な健康状態や家庭事情をかかえた学生は多いが、今までは健康上の理由によって実習の受講を事前に取りやめさせる事はなくて済んでいる。この健康状態の申告欄には、ごくたまに、「絶好調！」とか、「頭が悪いです」



日本大学 教授 佐伯 真魚

などと書き込む学生がおり、そのような学生は要観察として対応している。

様々なアレルギーの申告は、年々増加している。これは確かに増加している事実はあると思っているが、精密検査が普及したことも理由のひとつである。日本で生活しているかぎりまず食べないであろう食物へのアレルギーであったりして、そもそも本人が発症した経験がないことも多い。この実習を担当するようになってから昨年度までの13年間では、この実習を受講して、それまでの生涯ではじめてウシという動物に触れたところ、ウシアレルギーだと判明した男子学生が1名だけいた。こういった場合は未然に防ぎようがないので、現場で状況に適切に対応するしかない。

また、破傷風については、その予防接種の費用について学部からの補助ができることをアナウンスし、できるだけ受けさせるようにする。これについても破傷風という致死率の高い感染症について知っている学生は入学時にはひじょうに少なく、丁寧な解説が必要である。実際の実習の最中に破傷風菌の感染リスクが生じることはまず無いが、将来的に、犬に噛まれるなども含め、不測の怪我を負った場合の事など想定すると、受けておいたほうが良いことであると強調している。

#### 4. 事前講義中の学生観察の必要性

事前の講義中は、適宜、学生に質問をして全員に挙手をさせることを数回以上は行うようにしている。例えば乳牛の写真を示して、これは体重が何キロと思うかと3段階程度の体重の選択肢をもうけて質問し、どれと思うかを皆に挙手させる。これを講義中に何回か行いながら、教壇から観察することによって、こちらの質問に対してまったく無反応な学生が見えてくる場合がある。挙手させるだけではなく、たとえば乳牛の分娩の動画を見せる。一次破水、二次破水、介助と初乳、講義室のスクリーンを今か今かと見ている数分間は、ほぼ学生全員が集中して凝視する。そのときに教壇から学生を観察すると多くのことが見えてくる。

畜産の現場での実習においては、当然ながら、体重が700kgの乳牛を誘導したり、豚でも100kg以上の個体をハンドリングする状況が普通にある。この動物たちが本気で暴れ出したら、我々ヒトではなすすべもない。事故の未然防止のためには、現場で学生に対して、今の説明と指示を理解したのか、理解していないかの入念な確認が必要であり、その確認をしたそのうえで、ようやく大きな家畜を相手に体を動かすことになる。そのため、現場で返事や意思表示がきちんとできない状態の学生、もしくは実習に対して意識の低い状態の学生を現場の実習に送り出すことは、本人だけではなく、その周囲の実習生と指導担当者もリスクに巻き込むことになるため、決してしてはならない。このような可能性がある学生を見つけた場合には、注意喚起し、その度合いによっては今年度の受講はせずに、次年度に受講を延期するよう指示している。

講義の終了時には、このような質問をして挙手させたことについて、誰が正解しているのか否かを見て点数をつけることが目的ではなく、そのような目的の質問であったことを説明し、現場でもきちんと返事と意思表示の反応をしてほしいということ指導している。

#### 5. おわりに

大学初年次教育において大型家畜を扱う実習実施にあたっての事前準備に関して紹介した。学生にとっては、入学後の早い段階で、今まで経験したことがなかった新しい可能性に出会うことで、その後の学生生活に与える影響はひじょうに大きい。実習現場での留意点等も機会があれば紹介したい。